

アメリカにおけるセカンドチャンスについて

13L052 田中 優貴

はじめに

セカンドチャンスという言葉を知ったことがあるだろうか。セカンドチャンスとは、犯罪者、不登校者、中退者、ホームレス、リストラなどによって失敗した人生をもう1度やり直すことである。勝ち組、負け組という言葉があるが、社会の流れを読むことができなかったことで、最終的には勝ち組から脱落し、負け組になってしまう。しかし、たった1度失敗したことで、負け組になるのは、不思議ではないか。勝ち組でも何かの失敗で人生が狂うかもしれない。社会は、そのような人々を無視したり、関係ないふりをするべきではない。そのような人々に手を差し伸べ、やり直しの機会を与えることで、誰もが社会で輝ける存在であるべきではないか。

2016年2月3日、元プロ野球選手の清原和博は、覚せい剤取締法違反で逮捕された。この報道は、プロ野球界をはじめ、多くの人々に衝撃を与えた。メディアの報道後、清原和博と親交があった、メジャーリーガーのダルビッシュ・セファット・ファリード・有（以下ダルビッシュ有）投手は「日本もセカンドチャンスを持てる社会にならないと」と述べて、更生後に球界などに社会復帰する道を閉ざすべきではないとの考えを示した。¹ダルビッシュ有投手は「こちら（米国）では1度薬物に手を出しても、もう1度（やり直す）チャンスをもっている」²と指摘した。日本では1度過ちを起してしまうと社会復帰することが難しい。失敗した人や他人と同じ考え方、行動のできない人は社会から異端視されてしまう。それでもそのような人々に対してもアメリカでは、手を差し伸べ、受け入れてきた。³大リーグでは、薬物中毒から再起した選手、監督がいる。⁴なぜ、アメリカはこのように、1度過ちを起してもセカンドチャンスを与えてくれる社会なのか。

『セカンドチャンスを与えてくれる国アメリカ』を著述した矢部武は、アメリカがセカンドチャンスを与えるようになったきっかけについて、アメリカ社会の多様性に関係しているとしている。アメリカ社会における多様性とは何なのか。また、一方で、人々に共有される価値観もあるのではないか。この論文では、アメリカ社会の多様性と人々に共有される価値観からどのように、セカンドチャンスが関係しているかについて考察していく。本論文においては、セカンドチャンスを与えてくれるアメリカにおける社会システムの現状、人々に共有される価値観、アメリカ社会における多様性について論じていく。

第1章 セカンドチャンスを与えてくれるアメリカ社会システムの現状

1. 学校教育

アメリカでは、16歳～24歳までの中途退学者の割合が同年齢層の約11%に達している。そのなかに不登校者も含まれることを考えると問題はかなり深刻である。しかし、矢部武は、「教育現場を取材しても、深刻さは伝わってこない」と述べている。その理由は、オルタナティブ教育がアメリカ社会で確立され、認知されているからなのではないかと矢部武は考える。オルタナティブ教育とは、正規の教育課程とは、別に設けたカリキュラムである。⁵ オルタナティブ教育には、さまざまな種類がある。世界的に有名なのは、シュタイナー教育、モンテッソーリー教育である。⁶ アメリカでは、不登校生徒や中退者を中心に受け入れる特別センター、成績の悪い生徒や生活態度に問題のある生徒を集めたコンティニューエーション高校、学校に行きたくない生徒が家庭で学習できるホームスクールなど、オルタナティブ教育の選択肢が非常に幅広い。⁷ これから、2つの学校を紹介し、オルタナティブ教育とセカンドチャンスの関係性を考察する。

カリフォルニア州オレンジ郡にある不登校学習センター（TLC：Truancy Learning Center）には、全日制コースと個人学習コースがあり、生徒のさまざまな問題や要求に対応している。全日制コースでは、1人の先生がほとんどのクラスを教えるため、先生と生徒との関係が築きやすい。また、コミュニケーションが図りやすくなり、生徒同士のケンカやトラブルを早期に防止できる。個人学習コースでは、自宅で好きな時間帯に勉強することができる。また、クラスが退屈な生徒、銃犯罪や校内暴力などのいじめが怖くて学校に行けない生徒、家庭が貧しくて働かなければいけない生徒などにとっては良い環境だ。アメリカでは、このような特別学習センターが各地に設立されている。⁸

コンティニューエーション高校は、正規の教育課程についていけない生徒や日常の生活態度などさまざまな問題を抱えた生徒を中心に集めた学校だ。カリフォルニア州コントラコスタ郡にあるオリンピック高校（OHS：Olympic High School）は約800人の生徒が在籍し、同州で最も大きなコンティニューエーション高校である。生徒の多くは、英語能力の欠如、学習障害、麻薬乱用、不登校、妊娠などさまざまな問題を持つ。OHSでは、個々の生徒の問題点や成績、出席状況、家庭状況などの情報をすべてコンピューターのデータベースに入力し、生徒の指導や支援に役立てている。三者面談も頻繁に行い、個々の問題解決を図っている。集中力や出席率に問題のある生徒には、授業時間を短時間にしたり、何限からでも出席できるようにするなど柔軟性を持たせる。非行、生活態度、麻薬、妊娠などの問題を抱えている生徒には、怒りの抑制法、コンフリクト解決法、麻薬乱用防止、妊娠教育、コミュニケーションスキルなどを身につけさせるためのクラスやセミナーを受けさせている。⁹

OHSのジャネット・サリバン副校長は、「生徒との関係をうまく打ち立てるには、彼らを人間として尊敬すること。彼らの尊敬を得るためには、先生の方からそうしてやらなければなりません。彼らの個人的な背景から家庭環境などを理解し、個々のニーズにあった適切な支援をすることです」と語る。アメリカでは、OHSのようなコンティニューエーション高校が各学校区に最

低1校ずつ設けられている。¹⁰

TLCとOHSのとりにくみからオルタナティブ教育の本来の目的は弱者を救済するのではなく、生徒の潜在能力や個性を伸ばそうという考えが根づいていることがわかる。実際、世界的に有名なシュタイナー教育、モンテッソーリー教育は、子供の自主性を尊重し、その年齢にあった教育を行うことを目指している。シュタイナー教育は、早期教育は行わず、小学校に上がるまで文字を教えることは一切なく、授業でも特定の教材を使わない。感性を重んじる創立者シュタイナーの哲学、思想を重んじている教育だ。¹¹モンテッソーリー教育は独自の教材を使い、暗記ではなくモンテッソーリー独自の教材を使って文字や数を手で触ったり、見たり、聞いたり、感じたりと、感覚で覚える感覚教育を行っている教育だ。¹²高校生の問題にとりくむTLCとOHSは、幼児教育であるシュタイナー教育、モンテッソーリー教育とは、異なるようにみえるが、生徒に無理やりやらせるのではなく、生徒が自主的に行えるような環境を作ることで、生徒を型にはめない教育をする点が共通している。オルタナティブ教育は、生徒を型にはめないことで、自主的にさせることができ、意欲的に参加することで、生徒のセカンドチャンスに実質的につながっていることがわかる。

2. 犯罪者の社会復帰

はじめに、でも述べたが、日本では1度過ちを起こすと、社会復帰することが難しい。しかし、ダルビッシュ有投手は、アメリカでは1度過ちを起こしても、もう1度チャンスを得ることができる」と主張している。¹³レンジャーズのジョシュ・ハミルトン外野手は、2001年の交通事故による怪我の治療中、期待の重圧にこたえられないことからコカイン依存症に陥った。しかし、度重なる挫折を経験しながらも、2005年頃には、アルコールや薬物との決別の意志を固め、再起した。その数ヶ月後には独立リーグから契約の打診が来るようになった。同じくレンジャーズのロン・ワシントン前監督も2010年に、コカイン使用が明らかになった後も監督を続けている。¹⁴スポーツ選手だけではなく、俳優もやり直しの機会を与えられている。ロバート・ダウニー・ジュニアは、薬物問題で6回逮捕されているが、それでも『アイアンマン』シリーズのオーディションで主演に抜擢されている。¹⁵このように、アメリカではセカンドチャンスを与えられやすいことがわかる。矢部武は「アメリカの少年犯罪者の更生施設を取材して驚くのは、施設と更生プログラムの多さ、柔軟性である。そこには、少年犯罪者にやり直しのチャンスを与えようという考えが深く根づいていることを実感させる」と述べている。¹⁶

アメリカでは、犯罪の内容や凶悪性、反省の度合いなどに応じて、グループホーム（民間の更生施設）、カウンティキャンプ（郡の更生施設）、州立少年院など収容される施設が分かれる。¹⁷グループホームのメリットは、規模が比較的小さく、1人1人の少年犯罪者と向き合うことができ、個々にあった更生プログラムを行うことができることだ。グループホームのなかには、専門性を重視している施設が多い。ここでの専門性とは、麻薬やアルコール依存症のリハビリ、窃盗癖を改善するなどの施設ごとの目的とそのためスタッフのことだ。専門分野を設けることで、個々の少年犯罪者に合った施設に振り分けることができるといふ柔軟性がある。¹⁸

カウンティキャンプは、グループホームより規模が大きく、敷地内に学校があるため、学校に行きたくない生徒も気軽に授業に参加することができる。カウンティキャンプでは、グループホームのように、専門性がない代わりに、さまざまな問題に対応できるように幅広い更生プログラムを実施している施設が多い。¹⁹

州立少年院は、グループホームやカウンティキャンプとは異なり、地域社会の安全を脅かすような少年犯罪者が収容される施設である。そのため、成人の刑務所同様に厳重に収容され、自由行動もほとんど許されていない。²⁰

アメリカの更生施設を3つ紹介したが、犯罪の凶悪性などに応じて、収容する施設を振り分けることができること、専門分野を設けるなど、個々にあった更生プログラムがあることは、アメリカの少年犯罪の更生システムやプログラムが、非常に多様性と柔軟性に優れていることを示している。

成人犯罪者にも柔軟な更生プログラムがある。プリズンドッグプロジェクトというプログラムがある。このプログラムは、受刑者が殺処分される捨て犬や虐待された犬を育て、新しい飼い主に引き渡すプログラムだ。カリフォルニア州にあるヒーマン・ジー・スターフ青年刑務所は、18～25歳の重犯罪者が約800人収監されている。受刑者は犬と3か月間訓練をし、寝食を共にする。このプログラムは、受刑者が人間的な感情を育むことが目的である。新しい飼い主に引き渡すとき、ある受刑者は「寂しいが新しい飼い主に引き取ってもらい、幸せになって欲しい」、「安楽死になるかもしれない犬を助けることができよかった」と述べている。受刑者の言葉から優しさや愛情が芽生えていることがわかる。ミッシェル・リー主任刑務官は「このプログラムの目的は受刑者が社会に適応できるようにすることである。責任を持つことにより、精神的に成長し、自分に自信を持つことができる。自分の感情をどう表現するかを覚え、相手を尊重し、命の大切さを学ぶ」と述べている。²¹

3. リストラ、ホームレスなど社会的弱者の社会復帰

アメリカでリストラやホームレスなどの社会的弱者を救済するシステムが確立した契機の一つとして、ジェイン・アダムズが存在が挙げられる。ジェイン・アダムズはアメリカの社会事業家であり、2度の渡欧を経て社会の最下層の人々と共に生きる決意をし、アメリカにおける社会福祉事業の先駆者になった。²² ジェイン・アダムズは、1889年、シカゴにハルハウスを開設した。ハルハウスは、ロンドンのトインビーホールにおけるセツルメントにならった社会福祉事業センターであり、社会的弱者の良き隣人であることを目指している。²³ 急速な工業化による19世紀から20世紀への世紀転換期の都市部における労働環境は非常に過酷であった。ジェイン・アダムズは、仲間と共に、働く女性や子供を守るため労働保護法を制定するために行動した。ハルハウスは女性団体のネットワークと連携し、協力することで、労働保護法制定への道を実確なものとした。労働保護法が制定するまで、ハルハウスの人々は労働組合、慈善団体、教会組織、社交クラブの公開集会で演説をした。この成果がアメリカ社会福祉のネットワークを築いたといえる。²⁴

130年後の現在、アメリカでは、リストラ社員にもやり直しの機会が与えられている。日本で

は、企業を解雇されると、全て自分の責任だと考えてしまう。しかし、人員削減の主な理由は経済的不況や企業の経営方針の変更などが多い。それは、企業側の問題ではないか。このため企業が費用を負担して解雇した社員の再就職先の支援をするのは、正当な方法だと考えられる。矢部武によると、アメリカ企業は誰を解雇するかを公正に決めるための解雇基準がある。そのため、解雇された人に企業はその理由を説明できるとしている。²⁵

コンピューター関連製品やサービスを提供するアメリカ企業のIBMは、深刻な赤字経営に陥り、1986年に46万4,000人いた社員を1994年には21万5,000人にまで減らした。²⁶ 従来IBMは、アメリカ企業のなかでは、珍しく基本的に解雇を行わない雇用政策を実施していた。このため、突然の大量解雇の知らせに動揺する社員は多かった。IBMは、寛大な退職手当割増金を支給したり、不当解雇で訴えられないように慎重に解雇リストを作成し、納得がいかない社員に対してはすぐに話し合いの機会を設けた。再就職先を探す社員には、人材派遣会社に登録料や再就職先に必要な資格の費用を負担した。このようにIBMは、解雇する社員に対して最大限の取り組みをした。解雇した社員への再就職の支援は、IBMだけではなく、アメリカ企業では当たり前のように行われている。アメリカには、再就職を専門に支援するアウトプレースメント会社が数多く存在している。アウトプレースメント会社では、再就職希望者に対して、精神的なサポートとともに、短時間で最適な就職先を見つけるために、履歴者や職務経歴書の書き方、就職の状況の提供、ビジネス・リテラシー教育など幅広いサービスを提供している。²⁷

アメリカでは、ホームレスにもやり直しの機会が与えられている。アメリカは、先進国で豊かな国の一つでもある。しかし、ホームレス問題は深刻だ。アメリカには、ホームレスを組織的に支援する非営利団体や教会が数多く存在している。²⁸ カリフォルニア州サンフランシスコ市にあるホームレス救済センター、セントラルシティ・ホスピタリティハウス（CCHH：Central City Hospitality House）では、ホームレスたちが創造性、自信、プライドなどを取り戻し、社会復帰できるように支援している。また同市にあるセント・アンソニー教会では、ホームレスに食事や宿泊場所を提供している。²⁹ アメリカ政府も、貧困家庭への経済的支援、失業者の職業訓練、低所得者専用の住宅建設推進などに積極的に取り組んでいる。矢部武によると、この背景にはホームレス問題は、個人だけではなく社会にも責任があるとの考え方が広く浸透しているという実情がある。そのため、政府や社会がホームレスに対し、人生をやり直すための機会を与えているのである。³⁰

第2章 人々に共有される価値観

1. キリスト教の赦し

前項では「セカンドチャンス」を与えるための制度的な枠組みを論じた。一方でアメリカ社会においては、「セカンドチャンス」を与えることについて、人々の間に共通する考えはあるだろうか。

アメリカは多人種多民族国家であり、さまざまな価値観が存在する。しかしながら、アメリカ

には、人々に共有される価値観があるとも考えられる。それは、宗教であり、キリスト教である。アメリカ人の7割、もしくは8割は、キリスト教徒であると言われている。キリスト教とは、どんな宗教なのか。多くの宗教においては赦しが伝統的に美德とされている。なかでも、キリスト教では、赦しが高く評価されている。なぜなら、キリスト教の神は悪を受け入れ、罪深い人間を赦す唯一の神だからである。³¹ ここからは、キリスト教の赦しの思想から罪を赦すアーミッシュの人々について述べたいと思う。アーミッシュは、キリスト教プロテスタントから派生した一派である。16世紀にスイスを中心としてヨーロッパで生まれ、16世紀の宗教戦争などによる長期的な迫害を受けたため、18世紀のはじめに、アメリカに移住した。現在、世界のアーミッシュの人口は約20万人で、その99%が全米21の州に、1%がカナダのオンタリオ州に住んでいる。³² アーミッシュは、ほとんど300年前の生活様式を保っている。現代の電化製品など、新しいものに頼らず、昔から使われている馬車、井戸水、水車発電機を利用している。また、アーミッシュは、絶対的非暴力主義を貫いている。そのため、戦争や訴訟などに反対している。なぜなら、聖書の記述を根拠にしているからである。そんななか、アメリカのアーミッシュがある事件に巻き込まれた。³³

2006年10月2日世界に衝撃を与えた事件が起きた。アーミッシュ乱射事件である。ある男（チャールズ・カール・ロバーツ4世）がアーミッシュ学校に銃を持って乱入した。ロバーツは、女子生徒10人を監禁した。そのとき、ロバーツは、女子生徒に言うことを聞けば何もしないと言っていた。だが、銃を発砲し、女子生徒5人が亡くなり、5人が重症を負った。銃を発砲後、ロバーツは銃で自殺した。1番年上の女子生徒は、年下の女子生徒を守るためにロバーツに「私を先に撃って」と言っていた。³⁴ 事件後、アーミッシュの人々は、殺人犯であるロバーツを赦すことを表明、その家族に思いやり深い対応をとった。この出来事は世界中に衝撃を与えた。アーミッシュの人々は、「赦すことは、普通のキリスト教の赦しであり、誰もがすべきこと」と証言した。³⁵ この乱射事件だけではなく、他の事件でもアーミッシュは罪を赦している。

1957年8月19日、アーミッシュ居住区で2人組の若い非アーミッシュ男性が金銭目当ての強盗をし、農夫が殺される事件が起きた。この事件でもアーミッシュは犯人への憎しみを全く示さず、殺された農夫の家族は、犯人に復讐したい気持ちを持たなかった。殺された農夫の父親は、息子のことを思うのは辛いと言っていたが、殺人犯に「神があなたをお赦しになりますように」と伝えたという。³⁶ 殺人犯は、裁判で死刑判決を受けた。しかし、アーミッシュから殺人犯の寛大な措置を求める手紙が殺到した。アーミッシュは、犯罪には報いが伴うべきだと考えているが、助命嘆願をしなければアーミッシュとして非難を免れないともしている。³⁷ ここから、アーミッシュは犯罪者に対して、一生憎むのではなく、寛容な気持ちが必要だと考えていることがわかる。聖書のある一節には、もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない、という言葉がある。³⁸ アーミッシュによると、アーミッシュの赦しはキリスト教の赦しそのものである。³⁹

アーミッシュはアメリカ国内における少数派のクリスチャンであるが、一方でこれらの事件によって、多くのクリスチャンのアメリカ人たちが自らの信仰を省みることとなった。アーミッ

シュの小さな町ランカスター（ペンシルヴェニア州）で起こった事件は、多くの共感を呼び、赦しがアメリカのクリスチャンの多くに訴えかける判断であったことがうかがえる。

第3章 アメリカ社会の多様性とセカンドチャンスの関係性

1. 移民によるセカンドチャンス

アメリカには、前章のような共有される宗教的価値観と同時に、世俗的価値観の中にも共有される特有のものがある。アメリカは、多人種多民族国家と呼ばれている。世界経済は今、国際的な労働力移動の時代に突入しているが、アメリカは、古くから外国人労働者を移民として受け入れ、市民権を与えてアメリカ国民にすることで、成長してきた国である。⁴⁰ 移民には、様々なパターンがあり、家族で移住することもあれば、単身者、徒刑囚もいた。移民の多くは自由の身で、リスクも覚悟した上での移住であった。また、雇用主から渡航費用を前借りして、最初の数年は返済のために働く年季契約移民も存在していた。⁴¹

アメリカの多人種多民族国家の姿を決定的にしたのは、1840年代末～1920年頃までにやって来た大量移民である。19世紀に外国移住した世界4,300万人の移民中1,500万人以上が移民統計を初めてとった1820年から1890年の間、アメリカを移住先に選んだ。1890から1920年にも、1,820万人が同様の選択をし、なかでも1907年は、125万5,000人がアメリカに移住してきて、記録的な年になった。⁴²

海外移住が増加した理由はいくつかある。まず第一に、ヨーロッパの人口爆発である。海外移住は爆発的な人口増加によって生じる社会的・経済的圧力を調整し、弱めるのに貢献した。人口増加で、ヨーロッパでは農民の土地相続問題が起り、相続者数の増加に対応して、1人分の面積が生活ぎりぎりの範囲まで縮小された。また、土地の細分化を防ぐため、長子相続制度が強化された。この状況で、食べるのに困る人、相続するものがない人にとって、海外移住は1つの生きるための選択肢であった。⁴³ 農産物の商品化と農業の合理化が進むことで、多くの農民は居場所を失い始めた。同時に貧困、小作料の上昇などの厳しい生活環境をはじめ、毎年の不況と凶作は、アイルランド人、ドイツ人、ポーランド人、イタリア人に海外移住を選択させる重要な要因になった。彼らの夢は、アメリカで開拓農民になること、またはアメリカでお金を貯めて、帰国後に故郷で土地を買うことであった。

工業化や機械化によって、仕事がなくなった職人たちも農民に続き新世界に移住した。⁴⁴ 19世紀のヨーロッパで頻発した革命と民衆蜂起もまた、大量移民を生み出す要因になった。海外移住をあまりしないフランス人でさえ、18世紀末には失望した革命家や名高い貴族たちがアメリカ合衆国に渡ったとされる。19世紀半ばには、空想的社会主義者、ユートピア主義者たちが、理想社会建設を目指して新世界に移住した。⁴⁵

膨大な移民数と並んで注目すべきは、移民の多様性である。アメリカの移民は、ヨーロッパ人を中心としながらも、⁴⁶ 出身国の多様性で際立っていた。⁴⁷ 世界中からの移民が押し寄せることが、アメリカの最大の特徴だ。⁴⁸ 20世紀を通じてアジア諸国から、またアフリカ大陸や中南米か

らの移民も継続的に多い。

2. 西部開拓によるセカンドチャンス

アメリカには地理的にも「セカンドチャンス」を後押しする環境があった。19世紀に一気に広がった国土とその開拓のための移住である。1803年、アメリカは、フランスからルイジアナを購入した。ミシシッピ川からその西側、ロッキー山脈に及ぶ広大な地域である。⁴⁹ これにより、アメリカ合衆国は、領土が倍増し西部開拓の足掛かりになった。西へ西へと領土を拡大していくことで豊かな生活を求める人達が移住、開拓をした。⁵⁰ しかし、砂漠地帯が多く、なかなか農地を開拓することができなかった。20世紀に入ると、農業技術が進歩し、水があまりなくても農作物を作ることができるようになった。また、水を引き入れることに成功し、砂漠を農地に変えることに成功した。現在は、大きな水路ができ、これを使って農地が開拓され、農業が盛んになった。⁵¹ 西部開拓は従来のやり方が通用せず、失敗の連続であり、未開の土地をどのように開拓すればよいか分からない状態であった。そのため、失敗を恐れずに何度も試行錯誤をした。しかも古い人間関係の助けを借りることができず、独立心を持った自身が行うしかなかった。そして、成功するために、何度もチャレンジをする精神が芽生えた。この精神は現在のアメリカ人にも「フロンティア・スピリット」として受け継がれている。⁵² 西部開拓は、建国以来行われてきたが、19世紀に入って一気に加速した理由は3つあると考えられる。

1つ目は、1848年1月にカリフォルニアのアメリカン川で金が見つかり、金鉱が発見されたことだ。アメリカン川で金が発見されると、金鉱脈目当ての開拓者が急増し、一攫千金を夢見てカリフォルニアに移住者が殺到した。⁵³ これをゴールドラッシュという。1848年8月にサンフランシスコの人口は約6,000人になり11月には、1万5,000人へと急増した。人口が増えたことで、衣食住が間に合わなくなり、多くの人はテント暮らしを始め、食糧不足で身体が弱ったりした。そのため冬の時期は命を落とした人も少なくなかった。また、どの採掘場でも下痢や赤痢、壊血病が蔓延した。⁵⁴

2つ目は、ホームステッド法である。西部の未開拓地で5年働けば、160エーカーの土地を無償で得られるというものだ。1862年エイブラハム・リンカーン大統領により公布された。こうして西部に土地を得たい人々の開拓を目的とした移住が始まった。⁵⁵ この背景には南北戦争がある。南北戦争の原因には、北部と南部の間に経済・社会・政治的な違いがあり、奴隷制を否定し保護貿易を求める北部に対し、奴隷制を肯定し自由貿易を求める南部が連合国として独立しようとして、北部と戦闘状態に入った。これはアメリカ合衆国に起こった史上唯一の内戦である。北部では、1812年の米英戦争により、英国工業製品が途絶したため、工業化が急速に進展した。流動的な労働力が必要なため奴隷制は受け入れられなかった。工業が基盤であったため、ヨーロッパ製の工業製品よりも競争力を優位に保つため保護貿易が求められた。南部では、農業中心のプランテーション経済が盛んで、特に綿花をヨーロッパに輸出していた。プランテーション経済は黒人奴隷労働により支えられていた。南部の綿花経済の発展は英国の綿工場（繊維工業）発展による需要に支えられていたため、英国中心の自由貿易を求めていた。アメリカの上院では各州から2

名ずつの議員が選出されている。このため、奴隷制度を禁止するか、しないかの決定は、上院の議員数に直接影響を受けるため、西部開拓が進むことで新しい州を巡り、自由州か奴隷州にするかで南北が激しく対立した。⁵⁶ 西部では独立自営農民が中心となりながら工業化が始まっていた。そのようななか、ホームステッド法により、西部開拓者は、自営農民として開拓した農地を無償で提供することを決定した北部を支持した。南北戦争は北部が勝利し、幕を閉じた。⁵⁷

3つ目は、大陸横断鉄道の開通である。ホームステッド法が成立したことで開拓者が増加した。また、南北戦争後は、ヨーロッパからの移民が続々と到着した。鉄道は開拓者や移民を安全に西へ運ぶことで、農村を都市に変えていく役割を果たした。⁵⁸

このように西部開拓は、アメリカに新しい価値観を与えた。しかもこれは新しい土地を持たない旧世界では発生しえないものをもたらした。自主独立で何度も挑戦しなければならない一方で、開拓者たちはそれまでの人生を知られることもなかった。新しい土地で新しい人間としてやり直す機会は、自立した開拓民である限り与えられた。そしてそれは「フロンティア・スピリット」としてアメリカの伝統の一部となった。

おわりに

第1章では、アメリカ社会システムの現状について考察してきたが、学校教育、犯罪者、リストラ、ホームレスにやり直しの機会を与える環境が整っていることがわかる。このことから年齢や環境を超えて、アメリカ社会全体がセカンドチャンスを与えることを認めていることが言えるのではないかと。第2章、第3章では、アメリカがセカンドチャンスを与える社会になった理由を人々に共有される価値観とアメリカ社会の多様性から考察してきた。第2章でアーミッシュ乱射事件について例をあげた。個人的には、加害者を赦すことはできない。大切な人を失う気持ちはずっと消えない。しかし、セカンドチャンスを与えるには、相手を赦すことが必要な行為だと考える。キリスト教的な教えは、赦しの宗教と言われている。アーミッシュは、キリスト教の教えで犯罪者を赦してきた。キリスト教は伝統的に赦しを重んじてきた。多くのアメリカ人はキリスト教徒だと自認している。⁵⁹ それにも関わらず、アーミッシュ乱射事件でのアーミッシュの対応は世界に対してだけでなくアメリカ人自身にも衝撃を与えている。相手を赦せること赦せないことは状況、立場、環境によって変わるのではないかと。しかし、多数派の教派に属するアメリカ人を含む多くの人々がこの事件に対するアーミッシュの対応に共感した。自らもそのような対応ができるだろうかと思問した人々は、赦しの宗教としてのキリスト教と再び向き合うこととなった。このようなキリスト教徒が人口の多くを占めるアメリカにおいては、赦しがセカンドチャンスを与えることにつながるの、信仰を行動に移すことであり、多くの人にとっての必然と考えられる。第3章では、アメリカは多人種多民族国家で移民によって作られた国であることを論じた。移民がアメリカ社会の多様性の基盤ではないかと考えた。また西部開拓について論じたが、それには、新天地で成功したいアメリカンドリームとチャレンジ精神がセカンドチャンスと関係があるのではないかと考えた。アメリカは機会の国、成功の国といわれる。成功には個人的努力が必要である。一般に「アメリカンドリーム」とは、ボロから富へという成功神話だと考えられ

がちだが、社会の底辺に入った移民たち、西部開拓者の夢はもっと地味なものだった。現状よりも、もっとまじで安定した生活をしたい、平凡だが幸せな家庭生活を築きたいというのが、彼らの「アメリカンドリーム」であった。このために彼らは地道な努力を重ねた。⁶⁰ アメリカがセカンドチャンスを与える国になったのは、人々に共有される価値観やアメリカという国家の形成過程に、関係していることが、第2章、第3章から考えられる。だが、なによりもアメリカ人が母国をより一層よくするために努力した結果がセカンドチャンスを与えるようになったのではないか。アメリカの移民や西部開拓者は自らの暮らしの向上を求めた人々であったがその努力は母国を豊かなものにした。豊かな母国の共同体において、新参者に機会を与えることが、母国自らのさらなる向上につながっていた。過去にとらわれず人々に機会を与えたことで、アメリカは豊かに成長してきたと言える。今後アメリカだけではなく、世界はセカンドチャンスを与えることに向き合わないといけないのではないか。私達が生きているこの地球上で、誰もが社会に貢献し、輝く存在でなければいけないと考えるからだ。そのためには、私達はセカンドチャンスを与えることについて真剣に考える必要がある。この論文をきっかけに私は、セカンドチャンスについて日々考え、向き合いたい。

註

- 1 中野渉「ダルビッシュ、清原和博容疑者に『セカンドチャンス』と持論」*THE HUFFINGTON POST* http://www.huffingtonpost.jp/2016/02/18/darvishkiyohara_n_9269046.html (2017年1月8日閲覧。)
- 2 同上。
- 3 矢部武『セカンドチャンスを与える国アメリカ』(2002年、共同通信社)、5～6頁。
- 4 中野渉、前掲のサイトより。
- 5 矢部武、前掲書、132頁。
- 6 徳武加奈子「人間性を高める『オルタナティブ教育』とは?」『パピママコラム』<http://papimami.jp/4832> (2017年1月8日閲覧)
- 7 矢部武、前掲書、132頁。
- 8 同書、133頁。
- 9 同書、133～135頁。
- 10 同書、135頁。
- 11 徳武加奈子、前掲のサイトより。
- 12 同上。
- 13 中野渉、前掲のサイトより。
- 14 同上。
- 15 「ロバート・ダウニーJrの知られざる15の真実」*Ciatr* <http://ciatr.jp/topics/30842> (2017年1月8日閲覧)
- 16 矢部武、前掲書、153頁。
- 17 同書、153頁。
- 18 同書、154頁。
- 19 同書、160頁。
- 20 同書、166頁。
- 21 NEWS ZERO「刑務所で活躍する犬たち」<https://www.youtube.com/watch?v=mjehDf6v1lg> (2017年1月8日閲覧)
- 22 野口啓子、山口ヨシ子『アメリカ文学にみる女性改革者』(2010年、彩流社) 249頁。
- 23 同書、249～250頁。

-
- 24 同書、258頁。
 - 25 矢部武、前掲書、219頁。
 - 26 同書、219頁。
 - 27 同書、220～221頁。
 - 28 同書、208頁。
 - 29 同書、209～210頁
 - 30 同書、212頁。
 - 31 ドナルド・B・クレイビル『アーミッシュの赦し』（2008年、亜紀書房）137～153頁。
 - 32 「勇気と寛容の人々・アーミッシュの生活」『大紀元』<http://www.epochtimes.jp/jp/2006/11/html/d76374.html>（2017年1月8日閲覧）
 - 33 吉田麻葉「アーミッシュの少女が犠牲になった銃乱射事件」『Down to Earth アーミッシュの暮らし』<http://dte-amish.com/427>（2017年1月8日）
 - 34 ドナルド・B・クレイビル、前掲書、37～54頁。
 - 35 同書、85頁。
 - 36 同書、122～123頁。
 - 37 同書、124頁。
 - 38 橋本滋男『福音書からイエスへ』（2006年、キリスト新聞社）29頁。
 - 39 ドナルド・B・クレイビル、前掲書、137頁。
 - 40 野村達郎『「民族」で読むアメリカ』（1992年、講談社）9頁。
 - 41 ナンシー・グリーン『多民族の国アメリカ』（1997年、創元社）21～22頁。
 - 42 同書、25頁。
 - 43 同書、26頁。
 - 44 同書、26～27頁。
 - 45 同書、28頁。
 - 46 野村達郎、前掲書、78頁。
 - 47 ナンシー・グリーン、前掲書、33頁。
 - 48 野村達郎、前掲書、78頁。
 - 49 世界史用語データベース『アメリカ合衆国の発展』http://www.yk.rim.or.jp/~kimihira/yogo/04yogo12_3.htm（2017年1月8日閲覧）
 - 50 金岡新「第97回アメリカ合衆国の発展」『世界史講義録』<http://www.geocities.jp/timeway/kougi-97.html>（2017年1月8日閲覧）
 - 51 中屋健一『明解アメリカ史』（1987年、三省堂）94～95頁。
 - 52 同書、95頁。
 - 53 猿谷要『西部開拓史』（1982年、岩波書店）134～137頁。
 - 54 同書、137～138頁。
 - 55 中屋健一、前掲書、122～123頁。
 - 56 山崎由紀、「南北戦争」、英語文化圏研究3、2015年5月28日開講、第6回授業資料より。
 - 57 北風嵐「(8)南北戦争とリンカーン」『大統領で綴るアメリカ史』連載<https://crmg.me/w/8584/34615>（2017年1月8日閲覧）
 - 58 成田雅彦「侵入する鉄道」『〈移動〉のアメリカ文化学』山里勝巳編（2011年、ミネルヴァ書房）89～92頁。
 - 59 ドナルド・B・クレイビル、前掲書、138頁。
 - 60 野村達郎、前掲書、139～141頁。

（卒業論文指導教員 山崎 由紀）

The Second Chances for American People

Have you ever thought of giving a second chance to someone who committed a serious crime or failed at something? Such a second chance could even offer him or her a life to live again in which they could aim to avoid the same mistakes again. In Japan, however, it seems extremely difficult to be given such a chance. If it were a legal crime, there would be no chance to live an ordinary life ever again. In America, on the other hand, it seems people are given a second chance even after they made a serious mistakes. In this thesis, I discuss the issue of second chances in the United States. Diversified values in America seem to help people have vision to forgive others. Some histories of migration, the frontier movement, religion and social welfare in the States will be discussed.